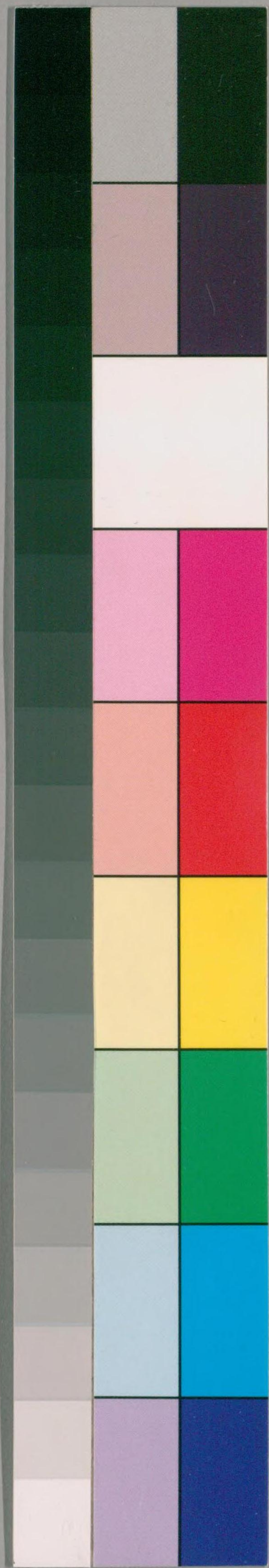


鳩の聲

863
125



国立国会図書館 タイトル『鳩の聲』 請求記号 863-125

ガラス使用

序

余在卿也過馬形村其風俗敦龐猗然不

起而雖樵夫牧子皆能繼世所謂耕

者以慰其情意焉蓋亦和翁之遺風也

余欽慕其韻度日已久矣頃其子秋風寄

鳩齋者曰是先人遺吟而門人舊知之

悼詞附焉因徵序余以嚮所聞則翁為



人朴而寬恕尤淡於榮利凡自文房什
器至衣服飲食儉質素薄毫無奢侈
之態其對人情欵藹然溫而能容人無
賢否尊卑待之以誠懼終日故雖狂
狽無賴者苟能悔悟就之則不向其淳
之誘導雖兒童走卒皆服其德量暇
輒招致父老子弟課以諧歌悠然自適而觸

情感物發之諷詠間不求工妙而能至其
妙然不敢留其稿故隨得隨失僅存十
之一二不亦深可惜乎今受而讀之則溫
雅典寧而無一毫軟靡之風固與世之
競奇術美者不同年談也嗚呼翁可
謂耆德君子矣宜乎使其鄉人皆能知
字且化善也夫孝子之於父杯捲几杖

猶且戀々不能捨况於其精神之所萃
者乎秋風之舉豈非孝子之至願耶余
欣慕翁非一日今也得其歌章以想
見其人則殆如親觀其容色而聞其
聲咳云文政十三寅二月大爺樵識
於東都昌平學舎

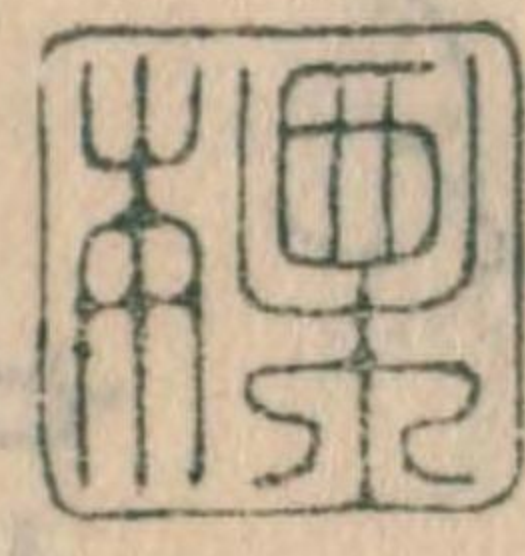
と云むし若此の心志世にのほそく
希朽くもそ松栢堂の教を業字ハ別家と云
あまのりひあとりて業とん性はと廉漁靴
りてりてとんをとおし垣下孫侍と云ん
以人をきるあ解力もきとんいひ我好いこも
何れ月の夕ち更たかり中村のいひあきり
あまのりひあとりて其まはら
あまのりひあとりて其まはら

あらねとともは清藤のいふこと
たふれとる個もあつていふこと
かゝるありとてし十七年とてたれ
孝子秋もぬし其ちのいふこと
たふれとる後とていふこと
送りのいふこととていふこと
拾のいふこととていふこと
たふれとるいふこととていふこと

様とて一回とていふこと
たふれとるいふこととていふこと
たふれとるいふこととていふこと
たふれとるいふこととていふこと
たふれとるいふこととていふこと

又三十三庚寅先難使のあはれ

栗の将軍の序



近後飯行と連歌

七人
鶴茶

若くは世に妙味きあるれ小松一丸

高て井とをまよふなり

家あるも同じ料理を下さぬ

鏡やうき千人をたりき

桶も清く茶のお細く是れふあり

ちよと一葉千のころり標ル

石と赤とわたりふききる鏡の舟

松風
枯庵
常風
日謙
如茶
汲井

市参くの叙了つえり

若れほ世の月小まぬ只男

魚川へ入るき易をこま

陸乃の千博奥かりり細うり

むらりかふある味暗乃操はし

花ませ乃母のふすの葉を入る

破る赤の千裡乃くきたり

傍らう猫乃葉をいふてきり

只一人の早ふきる夕舟

謂孝

於

庵

常

徳

茶

舟

若

於

青月如波つらつて踊る丸の月
 帯り糸をたぐき通ひ子
 涙濡そとやり乃茶裏七い合せ
 夢いそよまきそ河をくると浮
 欠落乃とるもほろろとあつた
 誰か可なりホホホと云すり
 空う出たといふ事妻身たつし
 酒のゆきそ歌もあつてあつた
 昔髪をさへもるもくは後家らあ
 常 庵 然 孝 外 宗 後 常 庵

新茶家送稿

美の神

松乳乃産子と免るふゆの如
 ぬと若や神と君との二をうら
 痛の毛も捨つてけりやあ菜指
 仁徳の青月千鳥とき爆中が
 若鶯や娘谷も耳やこころ
 う久ひとや里列てあて小松京



遊郭のしんがら加茂り砂持

謙

けをを賣りてむいほとも果たぐ

果

阿保の良えとまのよみよ

作

貫舟乃田うけ強あかりて過キ

孝

鹿の續る尺ハり身子

蛇

の畧

梅のしんがら梅の春とすは極をしら

葉の落しゆくして続てぬらし梅のむ

枝とよみおきぬきやくのむらぬ

あふさるるあがり中よりうを連るあ

夕やぬ海より管壁るあかりしう程

あふさるるあがり中よりうを連るあ

あふさるるあがり中よりうを連るあ

あふさるるあがり中よりうを連るあ

あふさるるあがり中よりうを連るあ

山よりお好きうしりうえいさう
秋花子 海草も 春うやあうし
次喜や 花 簾 下れい 帆 船
ふれ子子と あまや 舟 長 舟
春の 風 草 中 清 又 春

秋の 郊

かゝのせう びんえんせふの 舞 妓 舞
橋 下 や 舟 中 舟 長 大 笑 び

墓 多 へ えて 舟 長 校 下 舟 長 の 娘
乃 舟 や 舟 と 思 へ 舟 長 娘 也
又 と 舟 長 舟 中 の 舟 長 の 舟
娘 さん 舟 へ 入 れ 舟 長 舟 長
舟 長 舟 長 舟 長 舟 長 舟 長
舟 長 舟 長 舟 長 舟 長 舟 長
舟 長 舟 長 舟 長 舟 長 舟 長
舟 長 舟 長 舟 長 舟 長 舟 長

此中佳境の候をふししり程
秋のまをりとりを痛くく愛くく
のまをりたえりま味能き程
女も愛りや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり

老の部

年をとりてまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり
能きくや人のまをりたえり

道草年 外れさむなく 霧乃 志 夏あ 夏丸

園き 故乃 ぎれくえくし 此の 感 夏あ 日人

滝 佛や 心 藤 是より乃 小 池 夏あ 青隠

いより 世の 免てくも なる 涅槃 像 夏あ 葛三

若子の 赤子 藤より 白や 杖 の 雲 夏あ るを

白雲 なる 赤子 藤より 白や 杖 夏あ 雲布

何す じし 人 赤き 杖より 橋 の 月 夏あ 直矢

蓮 花 赤や 杖より 藤より 戸 の 雲 夏あ 棹江

引 起 ぬ 垣 の 後 より 雲 乃 水 夏あ 宇牧

結乃 母の 赤く 減るや 榊 系 夏あ 完知

ちう 曉乃 鏡 の 白いや 後 の 月 夏あ 卯六

梅より けを 赤く せも 免る 藤 乃 雲 夏あ 阜池

ちう 赤や 拂ひ 挽く 赤 乃 市 の 垣 夏あ 波踏

蝶 赤く や 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 夏あ 申蝶

なま 赤し 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 夏あ 石

後を 見え 赤く 赤く 赤く 赤く 赤く 夏あ 赤井

鳥 赤の 鳥 鴨子 挽り 山 路 の 蛇 夏あ 雉

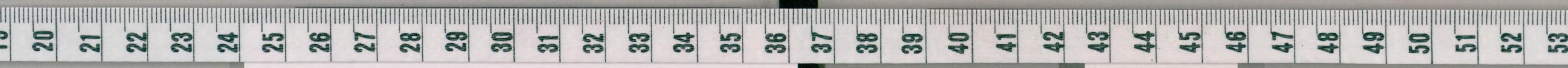
赤 赤乃 紅く 紅く 紅く 紅く 紅く 夏あ 雨赤

飯時了者くもさししれこ子
 善うあや 灰あししてもあやあ
 干松了らほあききさるしつ
 鉄抱るあ場。薩中松本教志
 枝千華あ秋少らあや 地生 日
 火くや 梅く梅さるもあああ
 雲さあああああああああ
 口説く人ああああああああ
 錦糸手あああああああああ

北有 一肖 志川 裏角 大乙 士老 孫厚 希疎

何ぞあやああああああああ
 ああああああああああああ
 葉の心や羽織脱きああああ
 松先子 尾の目刺や 松了を
 ねまのりああああああああ
 松ああああああああああ
 何若事ああああああああ
 近くのか、能居るああああ
 何ぞああああああああああ

漢中 玉映 榎百 佳花 葉皮 葉森 石原 岳来 如箭



とつちもや 旭をきる 播りし 丹人

以てに 砂をきり 絶子の文 何分野意 梅子

短一寸 二百九 絶る 居ひし 小松意 大卷

美ら 水の 縁に 雀 乃 日 如 しの 籠 伝意 又 終

田の ち 終る 子 善ん こと ち ち 善ん 山 蕉 山

山 終る ち ち 終る 善ん ち ち 善ん 山 柳 人

幸す 所 子 不 し ち 終る 籠 柳 しの 籠 臨 己

ち 子 子 乃 善ん 二 階 ち 係 ち 善ん 籠あり 柳あり 南 礎

汝の 善ん ち ち 善ん ぬ 門 ち ち 善ん の 丹 三 河

後 乃 善ん ち 善ん 二 丹 しの 柳 柳あり 鳴 月

山 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 茂 籠

形 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 李 虫 籠あり 柳あり

そ 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 聖 露

袂 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 氏 磨

是 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 兵 馬 柳あり

か 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 飄 尾

玉 乃 善ん ち 善ん ぬ 門 ち 善ん ぬ 丹 茶 笠

十四

杖ニ如くしつ婦小英り戸口が 葉室
とありあふとくはあはれおれ亦あはれ 岩毛
顔あふとくはあはれおれ亦あはれ 又年
喜あふとくはあはれおれ亦あはれ 狹園
いっふやあふとくはあはれおれ亦あはれ 林
歩あふとくはあはれおれ亦あはれ 堤山
志原
あふとくはあはれおれ亦あはれ 如水
あふとくはあはれおれ亦あはれ 可槍
田平とくはあはれおれ亦あはれ 香豆

子代わたりあはれおれ亦あはれ 毛江
帰あはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 茶城
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 新玉
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 夕亭
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 李仙
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 笠井
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 松本
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 玉島
あふとくはあはれおれ亦あはれおれ亦あはれ 佐城

十五

さしつゝと 櫻のふし へるさうへん 美奈

月夜 一 余をのりまへて 死ねん 林曹

うきやうと 夢をのり 櫻子 拾ひ 皆 大藤

海下 へん 家へ 来え 海や 雲の 中 桐中

山茶花 や 柱子 愈へ 本橋 櫻 友橋

徳領り あり 居れ ても せよ み 世を する 鳥久

玉のり せよ 登り けり 心 への 梅子 鳥次

あめり けり 柱子 愈へ 一 蕙 行 鏡梅

松山 千代 居り せよ 雲や 幾子の 歌 又 瓊糸

砂ぬえ へ きて しく くの 丹 物 幾 露頂

口 守り ず 野の 見え 形 幾へ 一 花が 心橋

元 月や ひより 笑を 向 橋り 友へ 日暮

一 花の とき 立 志 けり 中 美の中 楓荘

大 町 櫻子 幾 櫻 枝 の ぼり くの 鏡 美の 鏡

夕 暮り や 白 木 一 乃 たり 妙 かり 多良

居り たり 居り たり あり たり あり あり 人

心 なく あり たり あり あり あり あり あり 元氣

おほらねやなくありはまぬ抄屋を

三つ止

丁介

叶えまねねの照ぬをぐわの屋

任福中

山崎

彼もさびりすんえむや

一茶子

寛原

歌よみやうまのとうろあ

言の葉

三子

保もさるふれはく保もあえ

一茶

瑞花

ほくあはひやねの雲あうり

備前守

山崎

猪のこまへんるまの死をさる

肥後熊

柳王

鳴りまゝの月あてをる物

但大

風守

橋さうややあ新了片

細女

あまのつゆのゆかー陸の鳴田

任術

廿七仙

おもしろ供まの指しをくこの中

五彦文

瑞ちとのあまひつ付くほを保

一茶

瑞兵

まろ子あま掃ぬんあ子のあ

芝新

ゆめたまは喜能あぬほの内

一茶

菴窓

ゆめあまのあまのあまのあ

和田

聖子

大粒よこつあやあま

松月

あまのあまのあまのあ

一生

了信

あまのあまのあまのあ

仙笑

十七

世にほとち遊さぬ中うむ中風 武女、廣山 阿市
夏はせしやうり人け 汲正が 日向 忍有

牛とる御せし只いなやたらあふ 極三木 久七

妙乃あふくやうと路しやう池より 山 元山

まきあふりつる流れや流るあふ 五 喜五

かこふんた板や舟の品と流る 三 三沙

あふしやう小橋乃あふ流る 踏 踏溪

流るあふり 知 知年やあふり 柳 柳のむ 柳 柳

牛習や流るあふり 流 流る 草 草し

水室書し月流る 流 流る 流 流る

か人こる 流 流る 流 流る

流る 流 流る 流 流る

流る 流 流る 流 流る

流る 流 流る 流 流る

流る 流 流る 流 流る

流る 流 流る 流 流る

流る 流 流る 流 流る

十八

父やけのね手ぢもして暮らさる
はあきくをいハ原乃虫けり夕の都 依事 物志
孫子並く少原の影や以たの夜 字級 物枝
夜乃あかむつまししとの川 字級 風を
すまはふなるを風子まきれり 一母并 吾人
林う歩乃帯襟の誘うく 一母後聖 一まふ
いのころ乃尾をきく 形股 存海
あふなきあや娘乃之給仕 月形
鳴子提外四乃あや千つうりる 江月

形乃をいとあはししてあえう都 可存
柴々々やん乃まゝあたらえあ歌 海仙
物乃誘うらか下いあを居くく理 お生 好盛
林尾む狐の穴の婦えとく 古他日 市原
字乃戸をま結く千咲葉う能 陸春
あつくとと情乃起まれハ物あ 池の 素顔
あまのこ乃信あや新乃を伴れ 海平 吾人
気結乃家てくあ乃役う能 一字サ勝 五芳
あ乃あを新くまののさあ 一母サキ 吾之

塔紙子柳方ひく小葉の聲
とて来れハ有り流ルたしし 何なる
川乃流平多るまかき 秋乃葉
山寺や塔の子ありに 花の泉
畑くらり 時宜しし 通らぬ 夢まじ
山文入地こころく 春心 変くも
冬く 残り 遠子平を かな 柳乃
滝佛や 袖うまの 子乃 丸木 楊
と 浮乃 夢乃 の 浮く の 夢し さい

お川

舎律

冬海

山

凡多

周月

典入

調六

東岳

望乃り 用をかしにし 且 存 可
也 是 乃 九ハ 柳 葉 乃 流 乃 色
柳 葉 乃 夢 乃 かな 夢 乃 心 乃 夢
月 柳 乃 夢 乃 痛 乃 付 柳 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花
夢 乃 花 乃 夢 乃 夢 乃 花 乃 花

東島

徐来

柳芽

夢乃

柳乃

木村

五京

夢乃

夢乃

七



一ふらふらと足おかしく踏ぬぬるも
 加古川 久武
 神の身とらふて産まらぬまねね
 大連 新武
 出池と止りて流るる今も秋乃るを
 同形 台茶
 夢より白き雲ひて今しは霞
 新理色 好山
 武士の一鞭多敷しこれに
 愚系
 如高川や藤の宿にぬれも
 別府 中野
 うらみとをさめし春の情し
 新甲子 藤笛
 夢をよめぬれぬ新しき新橋
 山籠
 かんきしとあうしは女を夢人けり
 本庄 瀬巻

一ふらふらと足おかしく踏ぬぬるも
 三枝
 撞抜の鐘を響けつゝ空の都
 三枝
 公成子や二度と其の居納の体
 三枝
 侍者や藤の蛭刺す夕明に
 三枝
 子乙女も撞抜て去ぬ夢寺の如
 子死
 塙橋子もあつらふや無数の如
 完栗 塙橋
 七ふらふらと免く居ぬるも
 塙橋
 二羽来りて夢の一羽張つゝ
 克亮
 秘のりも蒸垣又ゆゑ小毒の難
 唯河 守三

六二

く免や描りあり春むす水地
末のふも他人のけは枇杷のむ
舟のふも小鉢むひも益り月
船籠る子一葉え神の柳

旭井
肉有
為一
唇反

上さけりありや夕暮花

旭井山

松鶴

地獄のまじい雲を柳のな

謂若

塔を何れ峰と跡く明あ

山勢

真乃君皆取半とちんちん

五風

岸程はありありとわはる春の
葉吹ひ位持子好織あきなり
ふと引くし橋渡りあきさくし
の葉や下種すひくも秋の
野乃のあきさくし山はつら
流るや魚のあきさくし
あつ流るあきさくし
橋をや二あきさくし
えさくさくし

杜若
真乃
あき
九能
杉雨
春蟻
杉人
梅明
笑山

百廿年つらえを悔しむ 樽（此の酒） 鬼角

花の垣を越へての妻のこころのけのけ 琴江

写すも心を花と見かたうけ 中端

欠落つ思案しし夢の芒うけ 小鶴

あけ山を巻く花のこころ 吾妻

花さしや家内年々うき世し 淡島

名月の花は南の帯に花 西尾

花さしや家内年々うき世し 阿比玉

花さしや家内年々うき世し 秋山

灯ともれば色もさかぬ花の葉の心 如月

花さしや家内年々うき世し 中六

花さしや家内年々うき世し 新友

花さしや家内年々うき世し 花溪

花さしや家内年々うき世し 楊鴨

花さしや家内年々うき世し 花鳥

花さしや家内年々うき世し 蛙啼

花さしや家内年々うき世し 柳風

花さしや家内年々うき世し 如振

廿四

等乃りしけかしこもる 板の輪 女年 鳩糸

小松磁一人子あそしきひり 杉倉

形に乃のきくどれ 後う柳 常風

病人子よてあしあを顔の姓 小

秋のきをかひいふを孫のき 結風

女魚の孫くきあや 柳乃瓦

かをひりし借る板は徳分 栲鹿

さ乃尾のなるつと長く栲板の如

子逢乃り表を一粒乃 柳子あらは

此葉も多くは四寸の 徳令士子

穢を乞ひ求むるも ちき求取

長き柳のき色 志かを可れと取

とき子逢乃り 古いを 商人とま

可い只は乃り 一葉を借して 求取

乃かききあつて 色あつて 求取

はしあきのしき ちかえん人

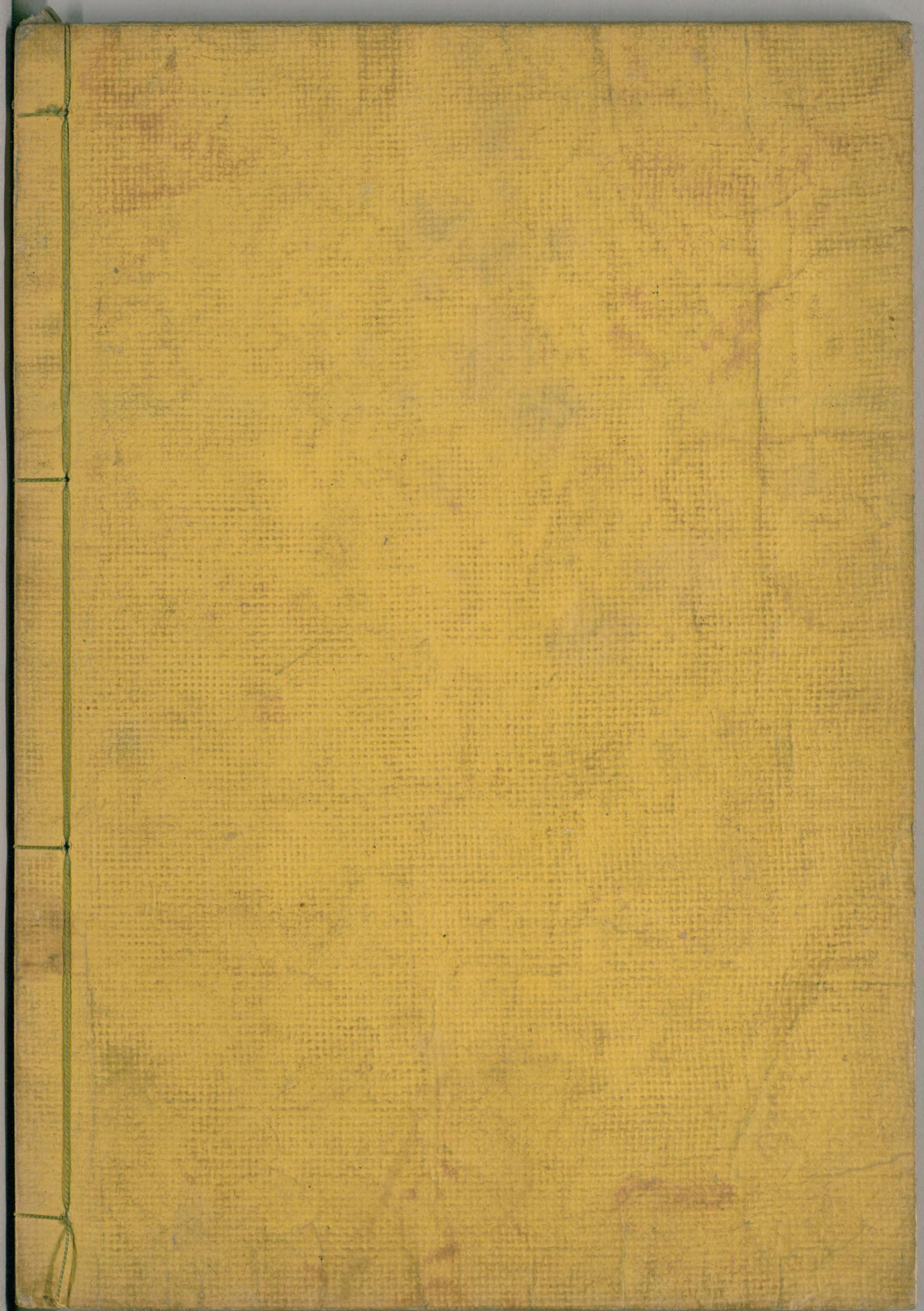
863
125

ホノ鳩の聲も陽春の葉も
といもんり香を新に

文正十三庚寅十月

赤松結風跋





国立国会図書館 タイトル『鳩の声』 請求記号 863-125

ガラス使用